

Stifterの「森をゆく人」におけるReue-Themaの特殊性

著者	米田 巍
雑誌名	独逸文学
巻	10
ページ	89-111
発行年	1964-12-10
その他のタイトル	Das Besondere des Reue-Themas in Stifters ?Waldganger"
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017656

Stifterの「森をゆく人」における Reue-Thema の特殊性

米 田 巍

序： Stifter の「野の花」„Feldblumen“ (1840年) の女主人公 „Angela“ については、O. Jungmair も指摘する¹⁾ように、今は、A. R. Hein のように 彼女を Amalie Mohaupt とする人はすくない。この意味で、L. Hohenstein も、Amalie のことを、„Pseudo-Angela“²⁾と称んでいる。この言葉は、Stifter の初期の作品：「秃鷹」„Der Condor“ (1840年) より「彫(絵)のある樅の木」„Der beschriebene Tännling“ (1846年) までの、特にその [初稿] においては、当てはまる。厳密に云うならば、これらの [初稿] が彫琢、加筆されて [習作集] „Studien“ 全六巻に編まれてからも、その中の第一巻、第二巻 (1844年、秋の発刊) までは、すくなくとも、この „偽りの…“ という形容語を冠する対象を見いだすことができる、と思う。例えば、「私の曾祖父の書類いれ」„Die Mappe meines Urgroßvaters“ の „Margarita“ である。[初稿] (1841年~42年) においては、まだ Amalie は „Pseudo-Margarita“ としてなら、登場する意味がある。しかし [習作集] 第三巻 (1847年、春の発刊) においては、もはや彼女は „偽りの…“ 姿として登場する意味を失ってしまう。と云うのは、作品の中の女主人公 „Margarita“ は、この頃は、既に、詩人の家庭禮拜堂の中に聖 Margarete として祀られていた、³⁾ からである。

では、Stifter が、彼の作品の中で、„偽りの…“ 姿をとって登場する Amalie と…別れる…のは、いつの頃からのことであろうか？ 私は、ここで、「森をゆく人」„Der Waldgänger“ をとりあげて、この点について、特に伝記的な源に観点を置いて、考証してみようと思う。

*

Stifter は、1845年、八年ぶりに、はじめて新妻を伴って Oberplan

[現在の *Horni Plana*: チェコ領] に帰郷している。彼は、1837年の秋に *Amalie* と結婚してからも、相変らず *Wien* の侘居で、家庭教師を本業に、売れぬ絵をかきつづけていて、まだ一度も、美しい妻を故郷の母にひきあわせることができなかった。ところが、彼は、1840年以来、「秃鷹」、「野の花」……と矢つぎ早やに佳品を発表する機会に恵まれて、須臾にして、当時のオーストリア文壇に特異の地位を占めるようになり、いくらか生活にも余裕ができたらしい。彼は、弟の *Anton* にあてて：「今年（1844年）は、お金の都合でみあわせるが…」と断ってから、「来年は、三ヶ月、上オーストリアに滞在します、これは既に心に決めたことですが、つまり七月、八月、九月、十月の半ばまでです」[1844年9月22日付けの手紙]と、はじめて、帰郷のことを伝えている。こうして、*Stifter* は、1845年以来、毎年、夏の幾月かをばいつも、「西北の山頂から、二つの塔のある教会の見おろす・」⁴⁾ *Linz* の町で過ごすことになる。

さて、問題となる、1845年の夏の帰郷である。*Stifter* は、7月15日に *Linz* に着き、10月8日に *Wien* に帰っている。その間、彼は、「*Linz* 郊外の、木立ちにかこまれた、とある美しい百姓屋敷」⁵⁾ に泊っている。これは、市の対岸 *Urfahr* [今は *Linz* 市の一部] の *Gstöttnerhof* に当たる。さて、この夏の——八月中のことと想像されるが——、更に *Linz* から *Oberplan* へ帰っている。*Johannes Arent* (1823~1893) の伝えるところによると、その途中、*Friedberg* [現在の *Frymburk*: チェコ領] に立寄っている。「*Fanny* は亡くなった、しかし彼女の両親は彼を出迎えに車をさしむけた、夫妻はその家に次の日まで逗留した。おそらく、過ぎし日々のもも思ばれたことであろう、しかしその（すべてのもの）の上には、（亡きひとの）⁶⁾ 穏やかな息がただようていた、そしてすべてのものが平和で安静であった」⁶⁾ と。*Greipl* 家の訪問——、この日も、幼い *Fanny* は、「豪華な彫りのある、古風な、黄金の額縁」⁷⁾ の中から、黒い眸で、詩人を見つめていたのだろう、と思われる。この…再会…は、*Stifter* が、1835年8月18日、*Christianberg* の教会で、彼女を、この世で最後に見てから、ちょうど十年めのことである。故郷の家は、「昨年而降雹と牛疫」のために「窮状」⁸⁾ にあつたけれど、母も妹たちも、*Amalie*

を心をこめて迎え、また彼自身も幾日も妻のために故郷の山河を案内して歩いた、と詩人自身が書いている。だが、ここに一つの不思議がある。Stifter は、次の年、即ち1846年にも、七月から十月まで Gstöttnerhof に滞在し、⁹⁾ 八月には、再び五日間、Oberplan に母を訪ねている。¹⁰⁾ しかし、この点は L. Hohenstein も特に強調するところであるが、¹¹⁾ Stifter は1845年の夏をかぎり、もう二度と妻を母のいる故郷に伴なうことがなかった、ということである。

*

以上の帰郷のことが、「森をゆく人」の素材となっているのだが、ここで、物語りの成立と、詩人が作品の成立後に示した態度に、眼を向けてみよう。この物語りは、1846年の、春の終りごろには、既に「その結末が、出来あがっていた」ようである。それは、詩人が、その年の5月22日付けの、Heckenast (出版者) あての手紙より推測されるのであるが、しかし、そのとき、何故か彼は：「すこしばかり…当惑…させられること」があつて、出来れば、「この夏に、落着いて」更に推敲したいものだ、と出版者に頼んでいる。結局、この物語りは、この(1846年の)夏、Linz で書きあげられることになって、1847年度 „Iris“ に掲載されている。

だが、この夏以後、Stifter は、その〔初稿〕を更に彫琢することもなく、そのまま放擲して顧りみなかった。この態度は、「三人の、みずからの運命の開拓者」 „Die drei Schmiede ihres Schicksals“ (1844年、„Wien 芸苑雑誌“ に掲載) や „Prokopus“ (1848年度 „Iris“ に掲載) に対するのと同様である。これらの三篇は、詩人の死後、ようやく J. Aparent によって、詩人の晩年の、未発表の作品とともに、1869年の「遺稿集」の中におさめられている。

これらの三篇が、〔習作集〕中に加えられなかったことには、それぞれ尤も理由がある。「運命の開拓者」においては、主人公たちが、自己の運命を „極く真剣に“ 開拓しようとする姿に、「森の小径」 „Der Waldsteig“ (1845年) の „Tiburius“ のユーモアを思わせるものがあり、更に „Abdias“ (1843年) の運命と、「古い印章」 „Das alte Siegel“ (1844年) の偶然性と、 „Brigitta“ (1844年) の特異の性格とが絡りみあわさられてい

る。また „Prokopus“ は、「愚者の城」 „Die Narrenburg“ (1843年)の補足、改作とまで評される¹²⁾ほど、主人公 „Prokopus“ は同じ „von Scharnast 伯爵“ の後裔であり、舞台も同じ „Rotenstein の城“ と緑の „Fichtau の谷“ であり、而も内容は、「森をゆく人」と同じように、…誤れる結婚…についてである。〔習作集〕の中には、「結婚」と „子供“ の問題を中心に取扱ったものには、既に「老鰥夫」 „Der Hagestolz“ (1845年)があり、また「古い印章」も „Brigitta“ も、主題的に同質の作品である。したがって、「森をゆく人」も、以上の、他の二作品と同様に、…主題の類似性…という点から、〔習作集〕中に編みいれられなかったのだろうか？

しかし、「森をゆく人」に関しては、Stifter は、1846年5月22日の手紙〔既出〕の中で、まず、Sigmund Kolisch (1816~1867) によって、「老鰥夫」が最も美事な…ドイツ的…短篇小説であると激賞された、と伝え、次に、「森をゆく人」について、更に彼自身が：「その結末が…最も適切…であり、また…最も効果的…であるから、„老鰥夫“ 以上の評判をとるだろう、本というものは、…終わり…の感じが、その成功を決める」と、「老鰥夫」にもまさる世評を受けるだろう、と大いに期待している。

彼は、この物語りでは、子供のないことより起こる…離婚…の問題を中心に取扱った。„離婚“ は、カトリックの国のオーストリアでは、キリストの定めた七つの秘蹟のうちの „婚姻の秘蹟“ に背くことである。彼ととも、このままの話しの筋で…終わる…ことについては、この作品は、内容上、社会的に容易に受け容れられないことがわかっていた。そのために、彼は、主人公たちの出所を、あえて北ドイツに設定した。主人公の „Georg“ については、「父は、北ドイツのと或る村の牧師であった」¹³⁾ とし、女主人公の „Corona“ についても、「両親は、ともに、更に北よりのドイツの出身であった」¹⁴⁾ と、している。この…更に北よりの…という表現は、彼女の洗礼式が、「プロテスタント教会のしきたりに則って」¹⁵⁾ 執り行われた、という言葉によって、特別に強調されている。„離婚“ は、洗礼と聖餐の聖礼典のみを遵奉する、プロテスタントには許されるからである。また、この問題は、北ドイツ婦人の、Kant 的な義務の観念をもつ

てしてのみ、解決されうるからである。婦人解放 <Emanzipation>は、フランスの七月革命 (27.—29.VII.1830) 後の、社会理念であった。だが Stifter は、文学もまた時代の、„自由“ に対する要請にこたえねばならぬ、とする都市文明的な・傾向文学に対しては、反撥を感じた。彼が、あえて…離婚…を中心問題に取扱って、「森をゆく人」を起草しようとした<動機>は、この物語りによって、 („Prokopus“ の場合と同様に、) 子供がなくても、 (また夫婦が性格的に相容れなくても、) „結婚“ をば倫理的に課せられた一つの務めとして無条件に肯定することによって、道義の向上をはからねばならぬ、とすること¹⁶⁾…にあったのは云うまでもない。しかし、オーストリアでは、作者の起草の動機が何であるにせよ、 „離婚“ を主題にした作品に対してはなおも誤解は免れがたい、との顧慮があったからだろうか？

併しながら、以上挙げた理由だけで、 Stifter が殊更にこの作品を等閑視したとするのは、まだそれだけでは十分に説明しつくされた、とは思われない。

ここで、もう一つぜひ考えてみねばならぬことは、彼自身の、当時の生活である。彼等が、依然として子供がなかったという・ „愛の憂愁“ が、詩人 Stifter よりも、人間 Stifter を、想像以上に、心くもらせていたのではなかろうか、という点である。

Stifter は、1841年8月28日の手紙で、ハンガリアの旅にいる妻にあてて：「男の子なら君のように美しく、私のように朗らかな子供を…ほんとうに、早く…産んでおくれ」と、まだしきりに望んでいる。だが、問題の1845年となると、はじめて：「私はおそらく…子供をもうけずに…死ぬだろうから」と、 „kinderlos”¹⁷⁾ の悲しみを洩らしていることである。彼が Amalie と結婚したのは、1837年11月15日であるから、この手紙の書かれたときには、およそ八年の歳月が流れている。これは、物語りの中では、「彼等が結婚して、今で、十三年めであった」¹⁸⁾ と、誇張して、再現されてくる。子供のない夫婦生活……、世に云う「実を結ばない無花果の木」¹⁹⁾ の比喻は、 Stifter にとっては、当時では、単に文学上での対象であったのではない、寧ろ、彼の一身上の、重大関心事であった、と云わねばな

らない。彼にとっては、子供をもうけるという、この・「一つの願いが、叶えられれば…、富貴にいちだんと美しい花をそえる」ことであり、もしそうでなければ、「幸いも空し」²⁰⁾ かったのである。L. Hohensteinも、この間の経緯を、種々と考証して、²¹⁾ 当時の Stifter は、たとえ世間の醜聞の種となっても、Amalie との結婚の解消を希望していた、としている。ここで、もう一度、1846年5月22日の手紙に眼を向けてみよう。「結末は、出来あがっている、だがその結末が、私をいささか当惑させるのだ」そして、「夏になって、落着いたら…」と、その…夏…になれば、何らかの解決の目鼻がつくかもしれないことを、仄めかしている。詩人は、常に、「非常に極端な可能性」²²⁾ を考えがちである。しかし、直ぐまた、「良心の呵責」[上記の手紙より]に苦しめられて、ためらうものとされている。この „夏になって…” という言葉は、彼が1846年の夏、今度はただ一人で、故郷に母を訪ねて、おそらくは Amalie との離婚について、結局、母に最後の意見求めたのだらう、と臆測される。母は、「森をゆく人」の „老寡婦“ のように、この…極端な…考えかたに対して、「まったく驚ろいて、ほとんど自分の眼も信じられぬくらい」であり、「死ぬばかりに泣いて」²³⁾ 彼を諫めたことだらう、と思われる。この夏の、母のもとの滞在は、前年の夏にくらべて、わずか…五日間 [既出] …であった。Stifter の母は、「行い正しく、寛容で、高ぶらず、しかも物わかりがよくて」²⁴⁾ 「底ひなき、愛の湖」²⁵⁾ のような婦人であった。彼は、勿論、この母の忠告に耳を傾けたことと思われる。而も、なお、今は亡き Fanny との…再会…以来、彼の心に染みた „孤独感“ は晴らすすべもなかったのではなからうか！ 彼は、仮構の上で、せめて „非情“ に徹しよう、と試みた。而もこの試みが、Stifter を、永久に、…救いのない、悔悛…によって、責めさいなむ結果になったのではなからうか！

*

私は、ここで、「森をゆく人」について、まず物語りを構成する・三つの章の説明よりはじめて、次に物語りの舞台と登場人物と、それから話しの筋を簡単に紹介してみる。

この物語りは：1.「森の河の畔りで」 „Am Waldwasser“；2.「森の斜

面で」 „Am Waldhange“ ; 3.「森の涯で」 „Am Waldrande“ から成り立っている。この三章の „構成の形式“ は、…独自…と評されるもので、²⁶⁾ 第一章が46頁、第二章が56頁、これらの二章に較べて、第三章はわずかに7頁^{註(3)}で終わっている。これは、「話しの筋が、 „発端“ から…継続して…そのまま „大詰め“ に運ばれてゆくのではなくて、…円形に動いて…再び „発端“ に…戻って…くる」²⁷⁾ ように、と意識して、仕組みられていることである。この三つの章の、全体が „円運動する“ ことは、この物語りの醸し出すムードである…否定的な動き…を、殊更に強調するためである。

„各章の標題“ もまた、それぞれ、象徴的意味を持っている。その標題は、いずれも、 „森の…“ という規定語と複合されてできている。Stifter にとっては、ボヘミアの „森山“ は、神の造りなし給うた…恒常的な、永遠の存在…である。第一章では、この „森“ に対する „河“ ——河は…不断に音たてて、流れ去ってゆくもの…²⁸⁾ 1. である。…人の姿の変わりやすさ…を表わしている。第二章では、 „森“ に対する „斜面“ ——それは…傾いていて、滑ってゆくもの…²⁸⁾ 2. 要するに…下方への動きを予感…²⁹⁾ 1. させる。…人の営みの崩れやすさ…を表わしている。第三章の „Waldrand“ については、 „Rand“ の解釈の仕方に対立がある。W. Rehm は、 „森の境界…に立つ…こと“²⁸⁾ 3. であるとし、H. Seidler は „森の涯へ、即ち森を囲むものの限界…へ来る…こと“²⁹⁾ 2. であるとしている。要するに、やがて…この世から、姿消えてゆくこと…、つまり „死“ である。…人の生命の虚 [虚] しさ…を表わしているのである。

次に、この物語りの<舞台>であるが、すべて実在している。物語りはじめにでてくるのは、若き Stifter が、 „恋人“ を Friedberg に残して、Wien に帰っていった „あの日“ [恋文IV]³⁰⁾ の道すじである。それは、(現在の、チェコと上オーストリアの・) 国境を越えて、Mühlviertel 郡の^{註(4)} の Weißenbach, Leonfelden, Zwettl, Haselgraben の溪谷を経て、Linz にくだってゆく道である。が、Stifter が、特に感慨をこめて描こうとしているのは、Fanny の生れた町 Friedberg から、Kienberg の森の近くの „悪魔の壁“^{註(5)} の奇峭を経て、森の僧院のある Hohenfurth [現在の Vyssi Brod: チェコ領] に至る、それは彼等の青春の日に „herumfahren“

[恋文I]³¹⁾した、Moldau 河畔^{註(6)}の風光である。しかし、以上の地名はことごとく第一章中に集約されていて、その他の二章では、主人公の „Georg“ の学ぶ都 [註] も Prag なのか Wien なのか明瞭でない。また彼の新築する家の所在地が、南ボヘミアの、どのあたりなのかも定かではない。更に、„Georg“ の童生いする、北ドイツの、あたりには山かげも森も見えない、その上には大きな天がひろがっている、ひろびろとした平原——そこに建っている牧師館のたたずまいは、Stifter が当時もまだ胸にあたためていた、Jean Paul 的な、平和な田園生活を想定してのことであろう。

この物語りに登場する<人物>は、冒頭の „作者“ は勿論のこと、主人公の „Georg“ も、Stifter であるが、„森をゆく人“ としては、彼の一つの未来像である。„Georg“ の父の牧師は、Stifter の Kremsmünster 時代のラテン語の教授であった、神父 Placidus Hall(1774~1853)にあたる。と云うのは、彼は息子に「ラテン語を巧みに教えた」ばかりでなく、「将来、息子が覚えて、知っている必要のある知識を、ことごとく、修得させた」³²⁾ からである。女主人公の „Corona“ は、大きな、黒い瞳をしていることと、また富裕な家に生れている点では、Fanny に当てはまるが、既に少女時代から人生の辛酸をつぶさに嘗めて、ついに「いつも、口をつぐんで」「感情をあらわさない」³³⁾ 娘になってしまう点では、明らかに Amalie にあたっている。„Corona“ が或る伯爵夫人の „お相手役“ を勤めているのは、Stifter の後を引継いで Schwarzenberg 侯爵夫人の代読者になった、若きユダヤの抒情詩人 Betty Paoli (=Babette Elisabeth Glück) (1814~1894) より着想されている。山番の息子の „Simmi“ であるが、彼が木の切れはして「Hohenfurth」を作って、「ほら、牝山羊が Hohenfurth へでかけてゆくよ、ほら牝山羊も……ね」³⁴⁾ と、幼い心の一途に、森の僧院にあこがれるのは、Stifter の「自叙伝断篇」 „Ein autographisches Fragment“ (1867年) にでていて、いつも「Schwarzbach を作るんだ」³⁵⁾ と、云うのが口癖だった・童 [註] Stifter の似像である。また „Simmi“ が、学校にあがることになって、「大地の、堅く凍りついた、11月の或る日」³⁶⁾ に遠く旅立ってゆくのは、少年

Stifter が1818年11月、万聖節の日に、Kremsmünster 修道院附属ギムナジウムに進学したのと同じである。更に、この山番の子供が、はじめ „森をゆく人“のことを「小父さん！」³⁷⁾ と呼んでいたのが、いつか彼を「お父さん！」³⁸⁾ と呼ぶほどに懐 [37] いてくる。その頃、Linz にも、Stifter を „父のように“ 慕う少年がいた。それは、Urfahr の学校教師の息子 Gustav Scheibert である。Stifter が1845年10月8日に Wien に帰ったとき [既出]、彼を同伴している。彼は Wien で法律学を修めるはずであったが、その翌年の11月20日に死ぬ。³⁹⁾ Stifter は、望みをかけた少年の夭折を悲しんで、「とりどりの石」 „Bunte Steine“ (1853年) の「緒言」 „Einleitung“ の中で：「私は偶然に彼と知りあいになって、彼を愛してきた、彼も私を…父のように…信頼してくれた。…彼が(私の故郷のボヘミアよりも) もっと光あかるい彼の故郷(：上オーストリア)で、ときどき、今なおこの世にいる年うえの友達のことを思いおこしてくれますように……」⁴⁰⁾ と、述懐している。

この物語りの、話し の〈筋〉は、第一章では、まず南ボヘミアの森や、Moldau 河の畔りの風光を、„作者“ が「深い森」 „Der Hochwald“ (1842年) におけるように「甘美な愁いにひたりながら」⁴¹⁾ 回想することからはじまっている。そして、この風光の中に、一人の老人が、いつも、一人の少年と連れだって登場してくる。この „森をゆく人“ のことについては、„作者“ も森で行き違ったことがあるが、彼が「他国の人らしい訛り」⁴²⁾ のある物の云いかたをしたことのほかに、彼が誰れであって、何時、何処からこの土地に…流離 [37] って…きたのか、知らない。彼は、はじめは樵の小舎に、今は山番の家に寄寓している。彼は「もはや何もすることのなかった老人」である。だが、彼には、いつも「まだ何もすることのない童 [37] 」⁴³⁾ の „Simmi“ だけが、まつわりついて離れない。やがて老人は、山番夫婦の、早くこの子にせて „祈禱書“ だけは読めるようにしてやりたい、との願いにこたえて、子供にまず読み、書きから教えはじめる。童児は、次第に、立派な少年に育ってゆく。将来、身を立てるのに必要なことを習い覚えるため、更に学校にあがることを勧められるようになる。だが、少年は：「お父さん、私は生きているかぎり、

お傍を離れません」⁴⁴⁾ と、言う。老人は、その少年に：「実の子供でも、いつまでも、両親の手もとにはいないものだ；……子供らは、みんな、この世に生きぬくために、家を出てゆくのだよ、両親をひとり後にのこして、ね」⁴⁵⁾ と、学校にあがることを勧める。こうして、山番の少年が、森を出てゆくと、それから直きに、„森をゆく人“ もまた、この森から「立ち去って…しまう」。⁴⁶⁾ そのあとに、彼の重そうな鋏を打った、ロシア革の長靴が脱ぎ棄てられている。

第二章では、話しは、65年まえに遡っている。主人公の „森をゆく人“ である „Georg“ の生い立ちからはじまっている。彼の父は、北ドイツのと或る村の牧師である。„Georg“ は少年時代には、幼い Stifter が祖母の実家のある Glöckenberg の神父になりたいと思ったように、父のような牧師になるのが願ひである。しかし、彼の父は、牧師ではあるが、いつも地理の本をひもといて、視野を世界の上にひろげているような人で、息子にも、自分が辿った・牧師になるための辛勞の多い道を、再び歩ませようとは思わない。„Georg“ は、家庭での教育を終ると、都の大学にはいり、父の希望にしたがって、将来は、法律家か官吏になるつもりで、ほとんど故郷にも帰らずに、勉強しつづける。が、両親は、息子の完全に成長するのを見ることもなく、死んでしまう。それからの彼は、いつか法律学から、数学、自然科学…へと志望を移して、そのうちに „建築学“ に没頭して、„家“ を建てることを天職として選ぶことになる。„30才“ のとき、都の或る伯爵夫人の邸で、その園亭の改築工事をしているときに、彼と同じ北ドイツ出身の娘 „Corona“ と知りあう。この „30才“ というのは、Stifter が1835年の冬に舞踏会で Amalie と知りあいになったときの、年齢に一致している。やがて、二人は愛しあうようになり「子供のない寡婦」⁴⁷⁾ の家に部屋を借りて、結婚生活にはいる。この新居の生活も、はじめのうちは、Stifter 夫妻の・Wien 郊外〔現在は3区〕Beatrixgasse 18 におけるように、佻しいかぎりであるが、Stifter が次第に文筆家として成功してゆくように、„Georg“ も仕事を着々と進めていって、ついに、南の、森のある国に土地を買って、森山の中腹に…家…を建てるほどまでになる。Stifter にとっては、„家“ は…人間を護り育ててくれる中心…で

あって、神の „森山“ に倣って、人間が作りだす „永続する存在“ を意味している。彼等も、「ここで暮らし、死んでゆくのだ！ これは、私のものなのだ！」⁴⁸⁾ と、云いうる „心の拠りどころ“ を得る。こうして、彼等は何不足ない、仕合せな結婚生活をつづけてゆく。しかし、依然として、子供ができない、ということによって、この幸福が完全には充足されない。ついに、13年めに、妻のほうから、子供のない夫婦生活は…「偽りの結婚」⁴⁹⁾ …であるから、この生活を解消したい、と申しでてくる。 „Georg“ もはじめのうちは思案に迷うが、やがて、彼女の云う…新しい結婚は、愛情からよりも、 „尊敬心“ からの結びつきである…との考えに傾いていって、彼も…離婚…を承諾する。Amalie は、Stifter から Fanny のことを打明けられたとき：「あなたが最初の恋をこのさきぎきもお守りなさるだろうと思うと、…尊敬…したくなるくらいですわ」〔恋文Ⅶ〕⁵⁰⁾ と、言っている。

第三章は、まず離婚後の „Georg“ の動勢が伝えられる。彼は家を売却すると、それから二度めの妻 „Emilie“ を迎え、二人の男の子をもうける。それからまた、13年の歳月が流れる。彼は、妻子を伴れて、と或る森を通りかかる。彼は、その森がもとの家のあった土地と地勢の点で似かよっているので、ここに再び家を建ててみようか、と心を動かされて、旅館にとまる。彼が子供をつれて、それも昔 „Corona“ といっしょによく歩いたような、森の小川に沿うた小径を散歩していると、偶然に、彼女と出逢う。彼女もまた、この土地柄に思い出をかけて、この近くの町に住んでいる。彼女は：「この子たちは、あなたのお子さんですか？」と、たずねる。彼は「そうです」と、答えてから「君も、結婚していますか？」と、たずね返す。すると、彼女は、頬をあからめて：「わたくしには、それができませんでした」と、云う。この瞬間、彼は思わず声を呑みこんでしまう。しばらくしてから、彼は、彼女のほうに手をさしだして：「お休みなさい、エリーザベト」⁵¹⁾ と、別れを告げる。子供たちは、 „Corona“ にもらった林檎を、…齧りながら…歩いてゆく。 „Georg“ は、既に58才である。彼は、今になって、このような子供を口実にして、 „物“ をとり換えるようにして、 „妻“ をとり換えた自分を…後悔…して、その夜を旅の宿で

泣きあかす。翌日、彼は、妻子を伴れて、再び、旅をつづけてゆく。その後、„Georg“ の子供たちは、一人は船員になり、一人は南アメリカに移住し、彼の二度めの妻も死んでしまう。

ここで、話しの筋が、再び、第一章に戻っている。„Georg“ は、いつしか、老醜の „森をゆく人“ に変貌してしまっている。ところで、„森をゆく人“ が、実の子供よりも愛するようになった・山番の息子と別れてから、彼が、今は、何処にいるのか？ また „Corona“ の消息も、杳として判明しない。

*

「森をゆく人」の〈主題〉は、既に述べてきたように、本来、…子供のいないことより起る、離婚…という問題であった。したがって、„作者“ は、はじめ、第二章に話しの筋の中心を置いていたことは、言うまでもない。

では、この物語りでの〈離婚〉の経過であるが、„Georg“ と „Corona“ とが結ばれたのは…孤独〈Einsamkeit〉…によってであり、また別れてゆくのも、再び、…孤独の状態〈Vereinsamung〉…に戻るからである。私は、まず、外面的な孤独をあらわす素材群に目を向けよう：寂しい国境いの、丘の上にぽつんと一つ建っている小さな教会堂、樵が一人住む山小舎、川守りの家々、子供のない寡婦；それから„Georg“ と „Corona“ の姿…。而も、子供のいないこと……、これは人間生活において、„孤独“ が強調されている実例である。„Georg“ は、家庭での教育を終ると、両親の膝下を離れて、遠く都にある学校に入る。彼はこのとき、はじめて、別れゆくことの…寂しさ…を味っている。彼が三年めに帰郷すると、両親が急に年をとったように見える。しかし、彼は、この両親を後にのこして、なおも専門の職業のための大学に学ばねばならない。彼は、母の涙に見送られて、再び都にもどってゆくとき、「彼によって活気づけられていた牧師館」に、ふと、云いしれぬ…孤独…を感じる。„作者“ は、この孤独感について：「牧師館は、また、前するとき（最初の別離）と同じように…物寂しげ…であった。この…孤独…は、来る日も来る日も、同じものであった、ちょうど太陽が低く館の屋根を照らして、夕方にいつも教会堂の塔

の珠飾りを黄金色に染める、その太陽が、毎日、同じものであって、物寂しげであったように」⁵²⁾ と、説明している。結局、„Georg“ は、遊学中に両親と死別することになり、彼は、両親の墓所を立ち去るとき「この世で唯だ一人」⁵³⁾ になったような気持ちになる。„Corona“ はというと、彼女の14才のときに、母が死に、16才のとき、父親が家政婦を家に入れて、彼女の第二の母にしようとしたときに、彼女は父に反抗して家を出てゆく。その父も借財だけ残して、死んでしまうと、多くの親戚たちも彼女を顧みなくなる。こうして、彼女もまた、„Georg“ と同じように、この世で…唯だ一人…となる。„Georg“ は、この彼女の人の柄にひそむ・「荒涼とした偉大さ」⁵⁴⁾ に惹かれ、彼女のほうも「常人とはどこか異った眼つき」⁵⁵⁾ をしている彼に好感をいだく。„作者“ は、ここで：「二人の魂が相寄ったのも、ともに…孤独…であったからである」⁵⁶⁾ と、説明している。

ともに、孤独であった……、この„作者“ の言葉は、当時、Fanny との恋に破れ、まだ定った職業もなく、将来に何んの希望もえられなかった Stifter の姿と、母と死に別かれ、病める父を故郷に残して、Wien でのときには画家のモデル女にもなって自活する Amalie の姿を、如実に物語っている、と思う。

が、„Georg“ は、Stifter の文学の道におけるように、建築業において成功し、立派にわが家も新築し、„Corona“ はその家居を「宮殿のように清潔に」⁵⁷⁾ 磨きあげてゆく。しかし、彼等は、いかに外面的に富裕になっても、依然として、子供のないという…内心の貧困との間にある矛盾を解決することができずにいる。ついで、„Corona“ が自分のほうから…離婚…という „尋常ならぬ行動“ にでるのは、彼女の内にいる „偉れてはいる“ が „寒々とした“ 性格に起因している。彼女は、父親を咎めて家を出ていったほど、潔癖ではあるが、我儘で、依怙地である。そのうえに、異郷での自活が彼女を引籠りがちにし、無口にし、いつしか、自分の周囲を見まわしてみる眼を失わせてしまったからである。或る夜会で、母親たちが子供らの歌う…ここの鳥…の歌に合せてうたったとき、„Corona“ は、子供がないので今も美しかったけれど、華やかに着飾っていたけれど、子

供という „冠“ を欠いている自分の…孤立…に堪えられなくなってしま
う。

„Corona“ の挙げる離婚の理由は、次のようである：「人間は、ただ一度
きり、人生を生きるにすぎない。この人生において、人間は、神に対して、
全領域にわたって人間的な義務を履行し、人間らしい喜びを満たさなければ
ならない。⁵⁸⁾ ……子供を儲けるということは、人間の、最も大切なこ
との一つ、おそらくはまず第一の権利に属し、また最も甘美な義務に属して
いる。⁵⁹⁾ …二人の人間に子供が得られない場合も、よくあることであ
る、だが彼等両者が相手をかえて結ばれるときには、彼等が子宝に恵まれ
ることである。⁶⁰⁾ ……法則というものの持つはるかに立派な目的は、二
人の人間が、悟性と心情の示唆するあらゆる高潔さと善意を契 [契] り
に対して、この契りが神聖にして且つ真に人間的なものになるように、適
用することである…、しかしそうなっているが、而も何びとも予測しえ
なかった事情によって „結婚“ が…偽りの結婚…になるとすると、その場
合には、この結婚は解消されてもよい、ということである；神を前にして
証 [証] しのたたぬ契りであったものは、自発的に、且つ善意と愛情の中
で、引き離される、ということではなければならない。……」⁶¹⁾ „Coro-
na“ は、更に「わたくしには、この行為は許されると思われるばかりでな
く、正しいこととも思われます。⁶²⁾ ……そうですわ、その主目的の一つ
を欠いているのに、結婚をつづけてゆくことは、わたくしには、寧ろ罪悪
のように思われます。⁶³⁾ ……私どもが得ようと求めるものが拒絶される
なら、それを素早く作り変えて、そのものが法則にかなうように定められ
ている方法を探ることは、いつでも、正当なことです。⁶⁴⁾ ……」と、
„Georg“ に説き勧めている。

ついに、„Georg“ も、離婚を承諾する。畢竟、彼等の „愛“ は、外面
的な孤独によって結ばれているのであって、月日の流れ去るうちに、いつ
かまた再び孤立する…運命…をはらんでいる、というべきである。この…
推移…は、既に、彼等の第一夜が暗示している。部屋にある家具は、「まだ
カーテンのかかっていたいなかった窓から、月の光りがさしこんできて、蠟燭
の光りと妖しく交錯して、…二重の光り…で照らされて」⁶⁵⁾ いた。K.

Steffen は：この „二重の光り“ は、いかに意志が強固であっても、いかに有為の才であっても、„推移し“、„変質する“ ことのあることを、暗示している、と云っている。⁶⁶⁾

Stifter は、——それは、一時的な迷いではあるにせよ——、聖書批評においても、„正典“ にも偽りの含まれていることもあり、„偽典“ にも正しさを見ることもある、そのように、以上の北ドイツ的、カント的な結婚観によって、„未来の子供“、即ち彼が芸術家として成功するためには、Amalie と別れることもやむをえない、と考えたのかもしれない。しかし、彼の „未来の子供“ は、結局、„Georg“ が二度めの妻によって与えられた、二人の男の子のように、貰った林檎を、なんの自制心もなくその場で齧りながら歩いてゆく、„衝動的な性質の…物…“ であったことである。Stifter は、このような „疑わしい“ 未来の完成よりも、現在の心のうちに、「愛と誠を…死…に至るまで」⁶⁷⁾ 持ちつづけよう、とすぐにも…内省…したことであろう、と思われる。神が、愛の秩序の中で、一と度び結ばさせ給う縁 [縁] を、人間は引き離してはならない、ということである。離婚する、という行為は、「各人が他のすべての人たちにとって „宝石“ であるように」⁶⁸⁾ と願う、„…真実に共にある…ための法則“ に悖る、ということである。と云うのも、「晩夏」„Der Nachsommer“ (1857年) において、„Risach“ 老人が教えるように、「度を過ぎた願いや欲望が…われわれの内…にあるときには、われわれはこれ等のことがらにだけいつも耳を傾けることになって、…われわれの外…にある事物の „罪のないこと“ を理解することが出来なくなる」⁶⁹⁾ からである。

この際、離婚を避けるための一つの方法として、…養子縁組 <Adoption>…のことも、考慮されている。が、„Corona“ は：「あなたが、いつか仰しやっていたように、亡くなった大工職人の男の子を…養子…になさるとしても、引き取られた子供は実の子供ではないのだ、ということをよくお考えにいられておいてください、ね」⁷⁰⁾ と、冷く撥ねつけている。この大工職人の男の子というのは、Gustav Scheibert [既出] と、それから義弟の Jakob Mayer (1829~1916) に相当する。Stifterの母は、1846年の夏 [既出] に、Jakobを引き取って、Wien の実科学校に入れてくれ

るように、と彼に依頼している。が、Gustav は夭死し〔既出〕、Jakob は Amalie と不仲になって、結局、Stifter は、1847年、妻の姪の、当時6才であった Juliane Mohaupt [1859年の浅春、ドーナウ河に投身自殺する] を養女に迎えることになって、„現実“には、この離婚問題は解決している。

さて、„物語り“の上では、離婚という、傷つけられた愛の…結果…が、問題となってくる。Stifter の作品では、大半は…悔悛…が根本思想となって表現されている。「晩夏」においてさえ、第三巻・4.「追想」„Rückblick“の章では、まだこの内容が扱われているほどである。この物語りも、結末の章では、離婚の結果、即ち<内省>と<悔悛>と<贖罪>が中心問題となってくる。ところで、既に〔第三章〕の標題のところで述べておいたように、H. Seidler は「森をゆく人」の解釈において、W.Rehm の云う „悔悛“ <Reue>よりも、„無常“ <Vergänglichkeit> のほうを重視しようとしている。⁷¹⁾ 確かに、この物語りには、„無常“をあらわす素材群が多い。例えば：雲の行くこと、小川の流れること、人間の流離うこと；また鳥の飛びゆくこと、車の駛りすぎること、別れを告げること；また滞在地の変ること、道の分岐すること、大陸へ、海洋へ逃れること…等である。そして、最後に強調しているのが、„森をゆく人“の脱ぎ棄てていった古靴であろう。しかし、私は、この物語りでは、„悔悛“と„無常感“が…共振<Mitschwingen>…しているのだ、と考えたい。W. Rehm も指摘しているように、⁷²⁾ „悔悛“という言葉が、第三章の中で、はじめて、而も唯だ一度きり：„— jetzt *berente* er, ……“⁷³⁾と、でてくる点である。この表現は、言や簡と云いたい、それだけに、肺腑にしみる響きのあることである。„Georg“は、離婚の後に、あらたに妻を娶り、二人の男の子にも恵まれている。二度めの妻の„Emilie“は、ここでは明瞭に Amalie に相当している。しかし、„Corona“は、彼女がみずから求めて、誤った人生を、13年間、心情と運命の孤独の中で、„贖罪“している。贖罪は、内心の解放へ通じている道であるからである。この際の„Corona“は、紛うかたのない Fanny である。この結末の章の、再会の

場では、„Georg“ と „Corona“ が交わす言葉数はすくない。今は亡き Fanny との再会であるからである。Stifter は、Greipl 家に立寄ったときには、「自分だって美しい・裕福な家柄の女を見つけることも出来るのだ、ということを実に示してみせよう」〔恋文Ⅶ〕としたのかもしれない。しかし、童女 Fanny の肖像画を眺めたとき、傍にいる彼の妻の美しさも、所詮は、「傷つけられた虚栄心」〔同上〕にすぎないことを、今また改めて痛感したことである。Fanny は、彼に背いて、ひとときの間、人妻となったとはいえ、僅か三年の結婚生活を送って死んでいつている。そして、「冷い土が、彼女の善良な心を埋めてから、既に長い月日」⁷⁴⁾ を、ひとり永遠の孤独に堪えて、なおも…贖罪…しつづけていることである。これを思うとき、この瞬間に、Stifter もまた、ぐっと声を呑んだことであろう。そして、しばらくたってから、彼もまた：「お休みなさい、エリーザベト」〔既出〕と、…最後の別れ…を告げたことであろう。„作者“ は、„Georg“ が „Corona“ を第二の名前の „Elisabeth“ でよぶのは、「彼が特に寛ろいでいて、気分のよいとき」の癖で、この名前が、„Georg“ には、いかにも「世帯もちよく」、「お客上手な」⁷⁵⁾ …のを思わせられたからである、と説明している。H. Seidler は：「この日常茶話の挨拶の背後に、一切がひそんでいる：いま一度ぱつと燃えあがった愛と、それから空しさへと沈みゆく、最後が…」⁷⁶⁾ と、述べている。この別れの言葉は、Stifter が、いつも彼の妻であることより、彼の支配者であるように振舞った・いわゆる「賢婦人」⁷⁷⁾ の Amalie の、よき半面に対して、…最後に…呼びかける、いとほしみの言葉であったろうか？ それとも、Betty Paoli [呼び名は、同じ Elisabeth: 既出] によせた友情に仮託して、今は亡き Fanny に対する恋情に、永遠に訣別する言葉であったろうか？ しかし、その向けられた方向がいずれであるにせよ、この別れの言葉には、もはや „偽りの姿“ の入りこむ余地のないほど、„悔悛の厳しさ“ がこめられていることである。

W. Rehm の云うように、„悔悛“ には、„有効な悔悛“ <tätige Reue> としての、„赦す愛“ <verzeihende Liebe> がある。⁷⁸⁾ 「晩夏」の「追想」では、„Risach“ と „Mathilde“ は、„情熱“ によって引き離されるが、

この „赦す愛“ によって再び結びあわされている。同じ<Reue-Thema>でありながらも, „Brigita“ においては, 愛が回復され, また [習作集] の「二人の姉妹」 „Zwei Schwestern“ (1848年) においては, 結末が平和と自由へ進んでゆく。しかし, „森をゆく人“ だけが, „老鰥夫“ と同じように「遅そすぎた」⁷⁹⁾ 悔悛のために, 永久に, „救いのない悔悛“ に苦しまねばならなかったことである。今はもう58才の, 建築師, „Georg“ は, 彼の人生の建造物が, ことごとく, 崩壊してゆくのを見ている。すると, 彼の涙の眼に, 神の „森山“ が映ってくる。彼は, 今更のように, その „森“ が人間の営みとは截然とした距離を保っていることを, 意識する。それからというものは, 彼には, この „森“ を見ていることだけが, 心の慰めとなってしまふ。ここで, 私は, „森をゆく人“ が, „Simmi“ が学校にあがるために森をでてゆくときに, 彼に与えた別れの言葉が: 「学問の窮極の目的は…神…を認識することである」⁸⁰⁾ と, いうことであつたのを想いおこしたい, と思う。

*

では, この物語りの, 問題の…結末…は, 何んであつたか? H. Seidler の云うように, 「この „結末“ は, 答えられぬままに, いわば人の世の現実の彼岸にある領域に入りこんでゆく」⁸¹⁾ のであるとすると, „森をゆく人“ の…立ち去つた…ことは, 「深い森」の „Gregor“ の姿消えてゆくのと同じである。しかし, K. Privat の云うように,⁸²⁾ 彼等が——特に, „Georg“ であるが—— „罪“ を意識したときには, …遅そすぎた…、この „遅そすぎた“ という言葉が, Stifter 自身の自負した, この結末の „最も適切な, 最も効果的な終わりの…感じ…“ [既出] であるとすると, „森をゆく人“ の…立ち去つた…ことは, 彼がなおも, 而も永久に…流離わねばならぬ…ことを意味してくる。ベルリン人, K. F. Zelter (1758~1832) は, Goethe と交わした手紙の中で, オーストリア人, 殊にヴィーン人気質を「忘れっぽい」⁸³⁾ と, 批評した。だが, Stifter にとっては, „悔悛“ は容易に忘れられるものではなく, それゆえの „孤独の道“ は遠かつた, と云わねばならない。それは, 彼が死のまぎわまで筆をとつて, 而もなお完成しなかつた・「最終・書類いれ」 „Die letzte Mappe“ が, 説明して

くれる、と思う。その中の、乞食 „Tobias“ が、永遠に、人家の軒から軒へと、流離ってゆく姿に、彷彿されている、と思う。

しかし、「愛はひたすらに前進するもので、後戻りはしない」⁸⁴⁾ から、この „苦悩“ も、おし黙っているが、しかし、いずれは…聞えてくる…贖罪となって、そして物語りの主人公 „Georg“ にではなくて、この物語りの „作者“ と彼の „理性“ の中に、やがて…宝石 [既出] …を生むであろう、ということである。

私は、最後に、K. Michel の言葉を藉りて、⁸⁵⁾ 小論の結びとしたい。Stifter もまた、Novalis のように、愛する人の死によって芸術家になった。

—了—

- 註(1) Pöstlingbergkirche と称ばれ、海拔537mの Pöstling 山頂に建つ霊場。
註(2) ihnen=allen; ein milder Geist=der milde Geist der Verklärten. この註解は、A.R.Hein: Adalbert Stifter Band 1, S. 248 に拠る。
註(3) 頁数の表示は、Max Stefl 編纂の Stifter 全集に拠る。
註(4) 上オーストリア州は4郡に分れている。その1郡。
註(5) Stifter は、Linz 在住の人のために、この奇観を画材にして、„Flußenge“ (Die Teufelsmauer bei Hohenufer) I, IIを描いている。[Fritz Novotny: A. Stifter als Maler (Wien 1941)] S. 94
註(6) 1959年以来、Oberplan から Lipno までの間は人造湖となった。Moldau-Stausee と称ばれている。

参 考 文 献

- 1) Alois Raimund Hein : Adalbert Stifter: 2Bde. (Wien 1952)
Band 1 : 7) S. 247.
Band 2 : 1) S. 896 f., S. 896 f., 7) S. 898, 12) S. 823
- 2) Lily Hohenstein : Adalbert Stifter (Bonn 1952)
2) S. 248, 11) S. 136, 21) S.143 u. S.147
- 3) Johannes Arent : Adalbert Stifter—*Eine biographische Skizze* (1869) —

- hrsg. v. Moriz Enzinger (Nürnberg 1955)
6) S. 54
- 4) Otto Jungmair : Adalbert Stifters Linzer Jahre (Graz 1958)
9) S. 17, 10) S. 18 f., 39) S. 16
- 5) Karl Privat : Adalbert Stifter (Berlin 1946)
16) S. 203, 82) S. 202
- 6) Konrad Steffen : Adalbert Stifter (Basel u. Stuttgart 1955)
22) S. 174, 66) S. 177
- 7) Ingrid Kracker von Schwarzenfeldt : Das Gestaltungsprinzip in vier Einzelwerken und im Gesamtwerk Stifters (BerlinerDiss. 1955)
26), 27) S. 36
- 8) Walther Rehm : Stifters Erzählung Der Waldgänger als Dichtung der Reue (Sonderdr.) aus d. Symposion (Freiburg, München)
28) (1), (2), (3) S. 362, 72) S. 360, 78) S. 352
- 9) Herbert Seidler : Die Kunst des Aufbaus in Stifters „Waldgänger“
In: Vierteljahrsschrift v. A. Stifter-Institut (Jahrgang 12) (Linz 1963)
29) (1), (2) S.87, 71) S.93, 76) S.89, 81) S.93
- 10) Briefwechsel Zwischen Goethe u. Zelter (1799~1832) hrsg. v. Gerhard Triebe (Nürnberg 1949)
83) S.86
- 11) Kurt Michel : Adalbert Stifter und die transzendente Welt (Graz, Wien 1957) 85) S.55
- 12) Hans Schumacher : Adalbert Stifter (*Briefe*) (Zürich 1947)
An Gustav Heckenast (Linz, 21. September 1845) 8), 17)
An Gustav Heckenast (Linz, 12. Mai 1858) 24)
An Louise Stifter (Linz, 21. April 1855) 25)
An Franziska Greipl (Wien, 1. Oktober 1829) 30)
An Franziska Greipl (Wien, 7. November 1828) 31)
An Franziska Greipl (Oberplan, 20. August 1835) 50)
- 13) Kurt Gerhard Fischer : Adalbert Stifters Leben und Werk (*In Briefen u. Dokumenten*) (Frankfurt a. M. 1962)

An Maria Anna Fürstin Schwarzenberg (Wien, 23. Oktober 1845)

5)

35) S.682

- 14) Adalbert Stifters Gesammelte Werke : 6Bde. hrsg. v. Max Stefl
(Wiesbaden 1959)

S. W. I *Die Mappe meines Urgroßvaters* : 3) S.636

S. W. II *Der Hagestolz* : 19) S.390, 79) S.370

S. W. III *Vorrede zu den Bunten Steinen* : 68) S.11

Einleitung : 40) S.16~17

S. W. III *Der Waldgänger* :

4) S.390, 13) S.432, 14) S.444, 15) S.446, 18) S.477, 20) S.471,

23) S.486, 32) S.435, 33) S.457, 34) S.411~412, 36) S.430,

37) S.419, 38) S.424, 41) S.385, 42) S.392, 43) S.415,

44) S.428, 45) S.429, 46) S.431, 47) S.459, 48) S.471,

49) S.480, 51) S.490, 52) S.440, 53) S.442, 54) S.457,

55) S.479, 56) S.458, 57) S.462, 58) S.478, 59) S.479,

60) S.480, 61) S.480, 62) S.481, 63) S.482, 64) S.483,

65) S.461, 67) S.493, 70) S.483, 73) S.491, 74) S.391,

75) S.464~465, 77) S.465, 80) S.425, 84) S.429.

Das Besondere des Reue-Themas in Stifters „Waldgänger“

Takashi YONEDA

Der Leser, der sich mit den Erzählungen Stifters befaßt, wird gewiß überrascht sein über das wiederholte Auftreten der Pseudo-Angela. Meiner Auffassung nach ist die Rolle der Pseudo-Angela jedoch begrenzt: sie tritt vom „Waldgänger“ ab nicht mehr auf. Dafür möchte ich die folgenden Gründe angeben.

Im Sommer 1845 kehrte Stifter zum ersten Mal mit seiner Gattin nach Oberplan heim—es war dies zugleich das einzige Mal. Dem Bericht von J. Aprent zufolge sei Stifter auf dem Wege nach Oberplan bei den Greipls in Friedberg eingekehrt. Fanny war tot, aber ihre Eltern hätten ihm den Wagen entgegengeschickt, Man habe wohl auch der früheren Zeiten gedacht, aber es habe ein milder Geist über allen geschwebt. Wie stark rief die Einkehr in Friedberg die Erinnerung an längst Vergangenes wach, und wie tief machte sie dem Dichter aufs Neue Fannys Bild im Herzen lebendig!

In den meisten Erzählungen Stifters ist die Reue ein beherrschendes Thema, und immer wird zuerst die Leidenschaft des Helden gebrochen und überwunden, daraus erwachsen dann Umkehr und Reue, und endlich büßt der Held seine Schuld. Nur die Erzählung „Der Waldgänger“, zu deren Gestaltung die Heimkehr im Sommer 1845 führte, macht eine Ausnahme. Die Helden, Georg und Corona, versuchen, von dem Schmerz um den versagten Kindersegen und von der Schuld, unter die sie beide das Schicksal stellte, frei zu werden. Wie jene zwei, so behauptet L. Hohenstein mit Nachdruck, müsse auch Stifter die Trennung von seiner Gattin mit Ernst in Erwägung gezogen haben. Aber im gleichen Augenblick, da der Gedanke ihn plötzlich überfiel—wenn das auch nur innerhalb der Dichtung der Fall war—, wurde ihm zugleich klar, daß er Fanny Liebe und Treue bis zum Tode halten werde. So kommt es, daß innerhalb der Erzählung die verzeihende Kraft tätiger Liebe nicht im geringsten zu spüren ist. Das deutet schon die kreisförmige Bewegung des Ganzen der Erzählung an, die sich in die drei Teile gliedert: Am Waldwasser, Am Waldhange, Am Waldrande. Die Reue ohne Erlösung—sie wiederholt auf ewig ein und denselben Übergang. Die Wiederkehr des Prologs im Epilog erkennt man an

dem Gang des Waldgängers. Er wandert für immer am Waldrande, ohne daß sich die Liebe wie in „Brigitta“ erneuere, und ohne daß er zum Frieden und zur Freiheit wie in den „Zwei Schwestern“ vorwärts schreite. Das Motiv des Fortgehens im „Waldgänger“ ist nichts anders als ein Vergehen. Der Mensch soll in den Grenzsituationen die Grenze reiner Immanenz erfahren. Stifter ist seit dem Sommer 1845 ein Wanderer in seinem Heimatwald geworden und sollte das nun zeit seines Lebens bleiben.